

# 敦煌写本「醜女縁起」について ——P.3048 の特質——

伊 藤 美重子

## はじめに

敦煌写本「醜女縁起」は、過去の悪業により波斯匿王の王女として醜く生まれた娘が仏の力で美しい姿に変わるという物語である。敦煌写本「醜女縁起」には5点の鈔本が存在し、これが『賢愚経』卷二「波斯匿王金剛品」に依拠することは、先行の研究ですでに指摘されている<sup>1)</sup>。この「醜女縁起」というタイトルはP.3048にのみ見えるものであり、ほぼ同内容のS.2114v、S.4511rv、P.2945v、P.3592vの4点の鈔本を含めて、それらをみな「醜女縁起」と称して同一の作品とみなし、初期の校訂本『敦煌変文集』はもとより、黄徵・張涌泉『敦煌変文校注』（中華書局、1997）、項楚『敦煌変文選注（増訂本）』（中華書局、2006）もそれら5点の鈔本を統合して「醜女縁起」の原文を提示している。この傾向に対し、近年、高井龍「[金剛醜女縁] 写本の基礎的研究」（『敦煌写本研究年報』5、2011）は、現存する5点の「醜女縁起」の鈔本を詳細に検討し、P.3048とその他の鈔本の書き換えの状況を指摘して、「醜女縁起」の鈔本には段階的な書き換えがみられると述べ、P.3048は他の4点とは異なる系統であり、先行する4点を発展させたものであると述べ、さらにP.3048の末尾に「上来所説醜変」の文があることから、因縁譚が「変文」に数えられるようになったと結論づける。「醜変」の「変」が変文を指向する語であるのかということについては議論の余地はあるが、高井氏が述べるようにP.3048は先行の4点をもとに改変を行っていることは確かである。本稿では、先行研究ではあまり言及されていないP.3048の表現の特徴および改変の意図について考察し、「縁起」および「醜変」の語に関していささかの見解を述べたい。

## 1. 「醜女縁起」の鈔本

「醜女縁起」の鈔本は次の5点である。各鈔本の状況、存行数、首部、尾部、関連情報は次の通りである。各鈔本の首部、尾部の数字は黄徽・張涌泉『敦煌変文校注』（以下、『校注』と略称する）での当該部分の頁と行である。敦煌写本の原文の表記には常用漢字を用い、誤字は（ ）に正し、欠字は〔 〕に補う。

S.2114v：首尾全、存104行、首題「醜女金剛縁」「我仏当日為救門徒（1102・8）…女喜顔色廻、灼灼桃花满面開」（書止、1108・4）（紙表：首題「大乘百法明門論開宗義記」）

S.4511 rv：首尾全、存170行（r135+v35）、首題「金剛醜女因縁一本」「我仏当日為求門徒（1102・8）…当時白浄軽如綿」（1108・15）、紙背題「金剛醜女因縁一本」（前に「結壇転経発願文」30行あり）<sup>2)</sup>

P.2945v：首稍欠尾全、存80行、首題「金剛醜女縁」「口仏当日為救門徒（1102・8）…父母。当時甚道（書止1105・13）」（紙表は曹氏帰義軍文書）

P.3048：首尾全、存145行、首題「醜女縁起」「我仏因地曠劫修行（1102・2）…当時白浄軟如棉。上来所説醜変（1108・16）」（朱字修正あり。紙背「壬午年<sup>3)</sup>二月廿一日」）

P.3592v：首欠尾全、存78行、〔〔 上欠 〕六道輪迴猶如〔 欠 〕於彼岸。此時（1102・8）…下情不勝恰好（1104・19、書止）（紙表は「老子道德経注疏」）<sup>4)</sup>

以上の5点の鈔本ではP.3592以外はみな首題を持つがそれぞれに異なる。

S.2114には「醜女金剛縁」、S.4511は「金剛醜女因縁一本」、P.2945は「金剛醜女縁」とあり、この3点に共通するのは「金剛」「醜女」「(因)縁」の語である。「金剛」は典拠とされる『賢愚経』の「波斯匿王女金剛品」の王女の名であり、王女は経文中で「醜悪」「醜形」の語で形容されるが「醜女」の語は用いられていないが<sup>5)</sup>、敦煌写本では「醜女」を醜い王女の呼称としている。P.3048の首題は「醜女縁起」であり、「(因)縁」「金剛」の語は用いておらず、この題名が他の鈔本との違いを示す指標として意識的につけられたものとも考えることができる。岩本裕「縁起の文学」（『東方学』30、1965）によると、「縁」「因縁」「縁起」の三語は本来

異なるサンスクリット語を漢訳した語であり、それらが混同され「縁起」が「事物とくに社寺などの起源・沿革」または「それに関連のある靈験譚」などを意味するようになったのは、漢訳以後のことであると述べる<sup>6)</sup>。醜女縁起の他に「縁起」というタイトルを持つのは「目連縁起」のみであるが、前掲論文で岩本氏は「醜女縁起」はアヴァダーナ説話ではあるが、「目連縁起」はアヴァダーナ説話の形式を持たないと指摘する。「縁起」の問題に関しては、べつの機会に検討したい。

首部に欠落がない鈔本の冒頭を比べるとS.2144、S.4511、P.2945 はみな同じであるが、P.3048には他の鈔本にない部分が加えられている。尾部は5点とも欠落がなく書き止まりの状態を終了し、P.3048とS.4511は終結が同じで他より長く、他の3点は終結がそれぞれ異なり、いずれもそれより早い。S.2114は場面の区切りで終結しているが、P.2945、P.3592は話の途中で書写を中止している。P.3048との比較にあたっては終結部分が同じS.4511の原文を用いることにする。S.4511の明らかな誤字・脱字については同系統の鈔本により正す。

## 2. P.3048「醜女縁起」の構成と概要

P.3048では、醜女の物語に入る前に枕すなわち「入話」として、他の鈔本にはない釈迦の本生譚が語られ、そのあと醜女物語の導入部として他鈔本と同様に仏の衆生済度を説き「醜女縁起」の話始める。その冒頭部分を除けば、「醜女縁起」本体の部分は内容により次の七つの場面に分けられる。各場面の概要を次に記す。場面の起止はP.3048原文の4字で示して『校注』での頁・行を付す<sup>7)</sup>。

「入話」 釈迦の本生譚＋導入部

- ①誕生：ある善女が羅漢を供養し布施もしたが、ふと聖賢に輕蔑の心をもったため、波斯匿王の王宮に醜い姿で生まれ王宮に閉じ込められる（仏在之日1102・14～戸不交開1103・10）。
- ②婿探し：年頃の娘を気遣い、夫人が大王に婿取りを進言し、王は臣下に婿探しを命じる（爾時波斯1103・11～臥不爭論1104・9）。
- ③成婚：命を受け宰相は王郎という貧士を婿候補として王宮に連れてゆくと、大王は喜んで宴を設け、新婦に引き合わせる。王郎は新婦のあまりの醜

さに気を失う。新婦の姉二人が醜女は器用でしかも王女であるにとりなし、醜女と王郎は夫婦となる。姉たちは妻を外に出さないようにと王郎にいつける（於是大臣1104・10～怕驚他驢1105・19）。

④**策略**：王郎は王女の婿となり、高官と交際し宴席を楽しむ。高官らは王女がみたいと各自の邸宅での輪番の宴会を計画し、王郎の家の番が近づく。王郎は憂鬱となり、妻にそのわけを尋ねられ真実を告げる（王郎既為1105・20～恥没精神1106・9）。

⑤**祈願・変身**：王郎の憂鬱は我が身のせいと知り、靈山に向かい仏の加護を求める。仏は醜女の発願を知って現れる。醜女は仏の美しさに感嘆し、仏が醜女を指さすと醜女は美しく生まれ変わる（娘子被王1106・10～作千般媚1107・10）。

⑥**対面**：夫が妻の部屋に入り美女となった妻に驚く。妻は仏の加護で生まれ変わったことを話し、王郎が妻の変身を大王に報告すると、大王と夫人は娘に会いに行く。美女となった娘に歓喜し仏を礼拝しに祇園に行くことにする（醜女既得1107・11～拜志恭敬1108・5）。

⑦**因縁**：王は千官を引き連れ仏のもとに行き、醜女の前世の因縁を問う。仏は波斯匿王にその因縁を説き、心から仏を信じ布施をすれば喜ばしいことが起こると告げる（於是槍旗1108・6～浄軟如棉1108・15）。

### 3. P.3048 と S.4511 の異同

P.3048（「P本」と略称）とS.4511（「S本」と略称）では、醜女の話に入る前の「入話」の釈迦の本生譚の部分を除けば、醜女の物語の展開はほぼ同じではあるが、処々に文の削除や加筆などの改変が行われている。P本とS本で特徴的な異同について場面ごとにたどってゆく。

まず、導入部についてP本には加筆が多く、特に韻文での加筆が多いのが特徴である。P本の韻文での加筆の傾向は以下の各場面にもみられる。導入部のP本の原文を引く。P本にのみある記述には《 》を付し、S本にのみある記述は【 】を付す。S本と異なる表現には下線を引き〈 〉内にS本での表現

を記す。ただし、単純な仮借字、誤字の異同は除く。韻字には二重下線を引く。  
我仏当日、為救門徒、六道輪廻、猶如舟〈載〉舡般〔運〕衆生達於彼岸、《此時》  
惣得見仏。今世足衣足食、修行時至、勤須発願。《有餘供養仏僧、得數結紹見。  
此時更若修行、来世勝於定現（見）。

我仏慈悲世莫遮、救度衆生遍河沙、惣得到於无為処、今生富貴足嬌闔（奢）。

人身不久如燈炎、世事浮空似雲遮、供養仏僧消滅障、来生必定礼龍花。  
来如（如来）長説誘勸門徒、焚香発願、勤念弥陀、修齋造善。》布施有多功  
徳〈多種因縁〉、一々不及広讚。設齋歆喜、早（果）報円満。若己些々手〈人  
些子〉攢眉、来世必当醜面。

（仏はそのころ、門徒が六道に輪廻するのを救わんと、舟のごとくに衆生を  
運び彼岸に渡し、《この時》皆は仏に会うことを得る。今生の衣食足り修行  
の時に到れば、勤めて誓願を発すべし。《余裕があれば仏僧を供養し紹見を  
結べ。この時の修行は、来世での定見にまさる。

我が仏の慈悲は世に勝るものなく、衆生を済度するは数知れず、すべて無  
為の境地に渡し、今生の富貴はおごるに足らず。人の身は燈火のごとく久  
しからず、世の事は空を遮る浮雲のごとし、仏僧を供養すれば障りは消え  
て、来世に必ず竜華会に詣でん。

如来は門徒に説き勤めるは、焼香発願弥陀を念じ、修齋して善を為せと。》  
布施には多くの功德（因縁）あり、いちいち説くには及ばない。齋を設けて  
歆喜すれば、果報は円満。もしいささかとも眉を顰めれば、来世に必ず醜面  
となる。）

この導入部の最後の句に、「醜女縁起」の発端が示され、本題にはいる。

①「醜女縁起」と経典との大きな違いはこの誕生の部分で、経典では最後に  
明かされるべき因縁が先に提示されることである。P本の冒頭部分を引用する。

仏在之日、有一善女、也〈他〉曾供養羅漢〈辟支仏〉。雖有布施之縁、心裏  
便生輕賤、不得三五日間《身死有何靈驗》。此女当時身死、向何処託生。〔向〕  
於波斯匿王宮内託生、此是布施因縁、《得》生於国王之家〈王家〉。輕罵〈慢〉  
賢聖之業、《感得》果報、無在於我大王夫人。讒（纒）生三日、進与大王。〔大王〕

纔見之【時】、非常驚訝。世間醜陋、生於貧下（貧賤）。前生修甚因縁、今世形容転差（醜乍）。大王道（觀世音菩薩）、

「只首思量也大查、朕今王種起（豈）如斯、醜陋世間人惣有、未見今朝悪相儀、…」

（仏ありし時、一人の善女が羅漢（辟支仏）を供養していました。布施の縁はありましたが、侮りの心が芽生え、数日もしないうちに《亡くなったのは何の靈験でありましょう。》この娘は亡くなり、いずこに託生したのでしょうか。波斯匿王の王宮内に託生したのは、布施の因縁により、王家に託生したのです。賢聖をあなどった業は、その報いは他でもない大王夫人の身に起こりました。生後三日目に、大王にお見せしたところ、大王は見るや、驚愕しました。世間の醜さは、下々に生まれるもの。前世の何の因縁か、この世でこの醜さとは。大王がいうことに（觀世音菩薩）、

「まことに思いめぐらすも不思議なこと、朕の王家の血筋にかくなることになろうとは、醜さはなべて人の世にあるとはいえ、この悪相はいまだ見ず…」

S本では「供養辟支仏」とあったのをP本では「供養羅漢」とする。『賢愚経』では醜女の悪業は辟支仏をののしったことであり<sup>8)</sup>、S本は經典に近い表現を用いている。散文で因縁を語った後、P本では話の流れを止めずに「大王道」として韻文に入る。一方S本では「觀世音菩薩」と唱えて間をおいてから韻文に入る。「觀世音菩薩」の語が記載されるのはこの場面のみで、S本系統の他の三点の鈔本にもみな「觀世音菩薩」の語を記している。「觀世音菩薩」の語は、「歡喜国王縁」「頻婆娑羅王后宮綵女功德意供養塔生天因縁變」「破魔變」などにもみえ、S本は仏教儀式の中で用いられることが示唆される<sup>9)</sup>。

②の場面は『賢愚経』では「女年転大、任当嫁処、時王愁憂、無餘方計。便告吏臣、卿往推覓本是豪姓居士種者、今若貧乏無錢財者、便可将来（娘が成長し、嫁入りの年になると王は、どうしたものかと憂鬱であった。そこで大臣にもとは名門の出ながらも、今は貧しく財産のない者を探し引き連れよと命じた）」ときわめて簡単に記述するが、P本、S本とも娘の行く末を心配した夫人

が大王に婿探しの提案をするという展開に改変し、多くの筆の費やし、大王と夫人の会話の中に不憫な娘を気遣う父母の心情を表現している<sup>10)</sup>。

③の場面で婿候補が王宮で大王にまみえ、醜女と対面する場面にはP本とS本の性格の違いが顕著に示される。少し長くなるが、その部分を引く。

【王郎登時見皇帝、道何言語<sup>11)</sup>】

於是貧士蒙詔、跪拜大王已了、叉手又説寒温、直下交人失笑。

更道「下情無任、得事丈母阿嫂。」起居進歩向前、「下情不勝恰好。」

【其是大王处分、排備燕会、屈請王郎、既到座筵。遣宮人引其公主对王郎。当爾之時、道何言語、】

新婦出、見王郎〈出来見郎〉、口（只）〈都〉縁面貌不得〈多不強〉、

姝女嬪妃左右擁、前頭掌扇鬧芬芳、金与玉〈金釵玉釧〉滿頭装、錦繡羅衣馥鼻香。王郎纔見公主面、誑〈聞〉来魂魄臃〈軀〉飛颺。

於是王郎既被誑倒、左右宮人扶起〈一時扶接〉、以水灑面〈已漉面〉。【良久乃蘇、宮人、道何言語】

女縁前生貌不敷、每看如〈恰〉似獸形軀〈頭牟〉。

天然既没紅桃臉〈色〉、占不頭盈白玉梳〈遮莫七宝叫身鋪〉。

夫主誑来身已倒、宮人侍婢一時扶、多少内人噴水救、須臾始〈活〉得却星（醒）蘇。

於是两个阿姊、卑猜〈恐被〉王郎。【恥嫌醜陋、不肯[却]歸。左右宮人、令皆惣急。[阿姊]無計、思寸且著卑辞、報答王郎云云】

「王郎莫生〈不用〉怪笑、只縁新婦幼少。

姊（妹）子雖不端嚴〈正〉、手頭裁縫最巧。

官職王郎不憂、從此富貴到老。些々醜陋莫嫌、新婦正当年少。」

王郎道苦、彼媒人悞〈悟〉我【将来、今日目前、見這個弱事、乃可不要富貴、亦不籍你官職、然相合之時、争忍其醜貌。思寸再三、沈疑不語】阿姊【又】道、

「不要称怨道苦、早晚得這親〈新〉媿、

況即〈雖則〉容貌不強、且是国王之女。

況今整是少年〈向今正直年少〉、又索得当〈唐〉朝公主、

鬼神大曬婁羅、不敢隈門傍戸。」

【於是王郎恥嫌不得、兩個相合、作為夫婦。阿姉見成親、心裏喜歡非常、到於宮中、拜賀父母。當時甚道云云】《阿姉又道》

「小娘子當時（如今）媁了、免得父孃煩惱、

推得精怪出門、任他到舍相虧（吵）。

【王郎咨申大姉、万事今朝惣了】

王郎遣妻不出、恐怕朋友怪笑、三娘子莫漫狂顛、不要出頭出腦（腦）〈恐怕朋友怪笑、小娘子莫顛倒、且須遣妻不出、不要出頭出腦、）【王郎心裏不嫌、前世業遇須要】。」

《妻語夫曰、「王郎心裏莫野、出去早些歸舍、莫拋我一去不來、交我共誰人語話。争肯出門出戸、如今時徒軋差、門前過往人多、恐怕驚他驢〔馬〕」》

（【王郎はさっそく皇帝にお目見え、そのさまこれいかに】

そこで貧士は命を受け、ひざまずいて大王に拝謁、拱手して挨拶すれば、たちまち人の笑いを招く。さらに言うは「わたくしかたじけなくも、お父様お母様兄嫁様にもお仕えます」と、ご挨拶して進み出て、「わたくし有り難さに堪えません」と。

【そこで大王は宴会の準備を命じ、王郎を招きよせ、宴につく。宮人をやり公主と王郎を引き合わせる。その時のさまこれいかに】

新婦がお出まし王郎と会い、面貌悪きことにより、姪女嬪妃に抱きかかえられ、顔の前に扇を持ちかぐわしく、金と玉の髪飾りにこうべを満たし、錦繡羅衣は香り立つ。王郎わずかに公主の顔をみるなり、驚愕して魂魄飛び立ちたり。

そして王郎は驚き倒れ、左右の宮人は助け起こして、水をかける。【しばらくして目を覚ます。宮人のさまこれいかに】

女は前世の因縁で容貌悪し、獣のような体つき。生まれつき顔色わるく、白玉の櫛で飾るもむなし。媚殿驚き腰を抜かし、宮人侍婢に助けられ、宮女たちに水かけられて、ようやく息を吹き返す。

そこで二人の姉は、王郎の心変わりを恐れる。【醜さを嫌い、承諾しないか

と。左右の宮人みな大慌て。姉は手だてなく、思いめぐらしご機嫌とろうと、王郎に云うことに】

「王郎どうぞ怪しみ笑わずに、新婦はまだ幼い。妹は器量は悪いが、手先は器用で裁縫上手。官職は心配ご無用、富貴は歳老いるまで。少しの醜さはいとわずに、新婦はまだ歳若い。」

王郎はしきりに思う、あの仲人に騙された【騙されて連れてこられ、いま目の前でこの事態、いっそのこと富貴も官職もいらぬ、互いに面と向かったとき、どうしてその醜さに耐えられようかと。あれこれ思いめぐらして、疑いためらい何も言わず】姉が【また】云うことに、

「どうぞ恨み言は言わぬこと、遅かれ早かれこの嫁取れば、容貌悪しとはいへど、なんといつても国王の娘、今まだ子供ではありますが、この国の王女をめとらば、鬼神がどんなに優れようとも、おいそれとは門戸に近づけぬもの。」

【そこで王郎は嫌がってもおれず、めあわせられて夫婦となりました。姉は婚姻整い心から大喜び、宮中に至り父母に拝賀。その時申した言葉やいかに】  
《姉がまた云うに》

「妹はいまや花嫁に、父母の悩みは消え失せて、妖怪を外に追い出せば、あとは二人に任せましょう。」【王郎は姉に申すに、「万事今日ですべて終わりと。】

「王郎よ妻を出してはなりません、友人に笑われぬよう気を付けて、妹よみだりにわめきたててはなりません、そとに出てもいけません。【王郎よどうぞ嫌がらずに、前世からの因縁ですよ。】」

《妻は夫に云うことに、

「王郎よどうぞやけにならないで、お出かけなら早くの御帰宅おねがいます。どうかわたしを一人にせず、私は誰と話ができれば。どうして家の外に出られましょうか。時が移ればますます醜く、道行く人は多いもの、驢馬を驚かせるのも恐ろしい。】」

P本がS本の散文部分を削除するという傾向はこの③の場面に多くみえる。

成婚の場面は『賢愚経』では王から娘が醜いことを伝えられた婿候補は王女がたとえ犬であっても結婚しますと二つ返事で承諾するが<sup>12)</sup>、P本、S本ともに経典にない醜女の姉二人を登場させ、公主のあまりの醜さに気絶し結婚をいやがる婿候補の王郎とそれをなだめる二人の姉のやり取りを喜劇風に書き換えている。S本では散文と韻文を交互に繰り返す形式をとるが、P本では散文を少なくして韻文で一気に語る形をとる。S本では韻文に入る前の散文部分に「道何言語」のやや小さな字の記載があるのが特徴的であり、この語の類は「破魔変」「八相変」にもみえる言葉であり、仏教物語のある一定の形式を踏襲したと考えられる<sup>13)</sup>。

S本にのみ記載される散文には王郎の心中を代弁する記述が多く、逆にP本にのみみえる「妻語夫曰」以下の部分には、妻・醜女の心境が加筆されている。P本はS本の王郎側の視点で書かれた散文部分を削除し、醜女側の視点からの韻文を加筆したのである。『賢愚経』では、王が醜女を家に閉じ込めておくよう命じているが<sup>14)</sup>、「醜女縁起」では姉の指示に改変され、大王一家のドラマに仕立てている。

④の場面は、経典では婿を酔わせて鍵を奪いこっそり王女を見に行くという単純な計画であるが<sup>15)</sup>、「醜女縁起」では各自の邸宅での輪番の宴会が企てられる。この部分はP本には書き落とした部分が多くあるようで、P本にのみ見える「是時王郎絡舎」の句が意味不明であり、この句を誤写とみなし意味の通るようにS本で補うと次のようになる。

【於是】王郎〈貧仕〉既為〈蒙〉駙馬、与高品知聞、緘〈書〉題往来、以相邀会。遂赴朝官之宴《会》、【同拜玉皆（階）侍御郎中、共相出入、州官県宰相】《是時王郎絡舎》、伴駙馬之筵、《僕射》尚書、同歡一坐。【已前諸官、密計相宜、要〔見〕公主、遞互伝局、流行屈到家中、事須妻出勸酒、既無形跡、烈（例）皆見女出妻、尽接坐筵。同歡永日如此、日日赴会〈日々不備歡樂〉、次第【漸】到赴馬家〈王郎〉排比【酒饌】。惟憂妻貌不強、慮恐〈思慮〉恥於還往〈往還〉、遂乃精神不樂〈精不安〉、宿夜憂愁。

（【そして】王郎〈貧士〉は駙馬となり、高官たちと付き合い、手紙をや

り取りし互いに訪問しあうようになる。朝臣の宴会に赴き、【共に玉階を  
拝し、侍御や郎中と共に出入りし、州や県の知事が駙馬の宴会に列席し、  
《僕射や》尚書も同席してみなで楽しむ。【かねてより諸官は密計をたくら  
み、王女を見んと、持ち回りの宴会を開き、順に自宅に招いて妻に酌をさ  
せる。】形式ばらず、娘や婦人を出席させて、一緒に楽しむことにした。  
かくして終日楽しむうちに、次第に駙馬〈王郎〉の家での【酒宴の】番が  
近づいた。妻の容貌醜きを愁い、仲間に恥ずかしいと、心は落ち着かず昼  
夜憂鬱であった。）

「醜女縁起」での策略はかなり手の込んだものとなり、王郎の憂鬱は臨場感  
に満ちたものになる。王郎の様子を見て醜女はその訳を問い、王郎は真実を告  
げるのである。

⑤の場面はS本、P本とも内容的には同様であるが、③の場面と同様にP本  
はS本の散文部分を削除して韻文で加筆する。⑤の冒頭部分は夫の憂鬱の原因  
が自分のせいと知った醜女が、我が身の因果を嘆き仏に加護を求めるとい  
う状況が散文と韻文で語られる。その部分を引く。

娘子被王郎道羞醜貌、不免雨淚、羞恥怨恨。此身種何因果、今生得如斯。  
〈公主既聞此事、哽噎不可發言、慚見醜質、燕（嘆）氣淚落。前世種何因果、  
今生之中、感得醜陋。夫主去後、便捻香爐、向於靈山、礼拝発〔願〕

公主（醜女）纔聞淚數行、声中哽咽轉悲傷、

《悪恨前生何罪業、今生醜陋異尋堂。

再三自家嗟嘆了、無計遂罪（罷）粧臺、心中億（憶）仏、乞垂加護。

懊惱今生貌不強、緊盤雲髻罷紅粧》、

豈料我無端正相、至（致）令暗裏〈闇地〉苦商量。

胭脂合子捻拋却、釵朵瓏璫調〈鏘拔〉一傍、

雨淚焚香思法会、遙告靈山大法王。

（妻は王郎に醜さが恥ずかしいと言われ、思わず涙、恥ずかしく恨めしい。  
この身は何の因果で、このように生まれたのか〈公主この事を聞くや、のど  
を詰まらせ言葉も出せず、我が醜さが恥ずかしく、のどを詰まらせ涙落つ。

前世の何の因果か、今生にこの醜さとは。夫が去ると、香爐を焚き、靈山に向かい礼拝し発願す)

公主(醜女)聞くや涙しとど、のどをつまらせ悲しみにむせぶ、《前世の因果と恨めしく、今生の醜さ常ならぬ。

幾度も我が身を嘆きつつ、思わず粧台打ち捨てて、仏を思い加護を求めん。

今生の姿あしきを嘆きつつ、髪を結び上げ化粧せず、》なぜに端正ならぬ我が姿、心ひそかに図りあぐぬ。紅の小箱を投げ捨てて、かんざし飾りも打ち捨てて、涙ながら法会せんと香を焚き、遥かに告げん靈山大法王。)

続く場面では仏に祈る醜女の姿が詠まれ<sup>16)</sup>、それから醜女の心に感じて仏が現れる場面では、S本には無い、醜女の言葉が韻文で表現される。

仏以他心通、遥知金剛醜女焚香発願。遂於醜女居処前、従地踊出、親垂加被<sup>17)</sup>。《醜女忽見大聖世尊、碎身堦前、魂墮自撲、起来礼拝。哽咽悲涕、啓告世尊、乞垂加護。醜女告世尊、

「自嘆前生悪業因、置(致)令醜陋不如人。

毀謗聖賢多造罪、敢昭(感招)容貌似煙薰。

生身父母多嫌棄、姉妹朝々一似噀。夫主入来無喜色、親羅未看見慙慙。

時々懊惱流双涙、往々咨嗟怨此身。

聞道靈出(山)三界主、所以焚香告世尊。】》

(仏は他心通の神通力で、遥かに金剛醜女の焼香発願を知りました。そこで、醜女の目の前の地中から躍り出て、親しく加護を垂れました。《醜女はにわかには大聖世尊を目の当たりにすると、階のまえにひざまずき、五体を地に投げ、起き上がって拝礼をします。嗚咽して涙して、世尊に告げて、加護を乞いました。醜女が世尊に告げることに、

「自ら嘆くは前世の悪業の因縁により、人ともいえぬ醜い姿となったこと。聖賢の誹謗の罪は深く、煤にまみれた容貌となり、生みの父母にも嫌われて、姉妹はいつも口げんか、夫は私を見るなり不機嫌に、親類も冷たいそぶり。常々悩み苦し涙して、いつもこの身を恨むのみ。聞けば靈山の三界の主のこと、香をたいて世尊に告げん。】》)

そして、仏の力で醜女は変身をとげる。その変身の具体的な情況はS本にのみあり、「金剛醜女歎仏已了、右繞三匝、退座一面、仏已慈悲之力、遥金色臂指醜女身、醜女形容、当時変改（金剛醜女が仏を讃嘆し終わると、右に三周してしりぞくと、仏は慈悲の力により、金色の腕で醜女を指させば、醜女の姿はたちまち変わる）」と書かれる。この変身の場面は經典のほうが詳細である<sup>18)</sup>。

⑥美女になった醜女に夫がまみえる場面は、P本S本ともに經典の会話を踏襲し、そこに少し脚色を加える。『賢愚経』のこの部分は「入門見婦端政奇妙、容貌挺特人中難有。見已欣然問『是何人』、女答夫言『我是汝婦』。夫問婦言『汝前極醜、今者何縁端政乃爾』」とあり、「醜女縁起」では次のようにある。

妻云道「識我否」、夫云【道】「不識」、「我是你妻【如何不識】」、夫主云（夫道）、「誑人、娘子比来似獸頭、交我人前滿面羞（娘子天生似獸頭、交我人前見便羞）、今日因何端正相、請君与我説来由」。

⑦仏を礼拝し醜女の因縁を問う場面は、經典では仏が因縁を説く重要な場面であり詳細に記述されているが、S本P本では、すでに因縁は最初にと説かれているので簡略にし、仏の力の大きさと信心布施の重要性が強調されている。P本はS本の韻文部分はそのまま踏襲するが、散文部分は簡略化する<sup>19)</sup>。醜女物語の最後はS本P本とも七言句の韻文でまとめられて物語が終わる。終結部の韻文を引く。

前生為謗辟支迦、感得〈所以〉形容貌不差、為《縁》不識阿羅漢、百〈不〉般笑效苦芬葩。將為惡言発便了、他家〈交〉業報更〔不〕差、得見牟尼身〈世尊親〉懺悔、当時却似一団花。

只為前生発惡言、今招〈朝〉果報不虛然〈專〉、誹謗阿羅漢果業〈報〉、致令人貌不周旋。兩脚出来如露主〈路柱〉、壹双可〈略〉膊似龜〈枯〉椽、纔礼世尊三五拜、当時白淨軟〈輕〉如槿。

（前世に辟支仏を謗りに、姿形はあしくなり、阿羅漢を知らぬゆえ、笑顔はすべて苦々し。悪言を発せば終わりと思いが、その報いはただならず、牟尼にまみえて懺悔すれば、たちまちひとむれの花となる。

まことに前世の悪口ゆえに、今の果報は嘘ならず。阿羅漢を謗りし報いに、

その容貌は美しからず。脚はずんぐり露柱のよう、腕はふとぶと椽のよう、世尊を幾度も礼拝すれば、たちまち綿のごとくに白く柔らかかに。）

そしてP本の最後に「上来所説醜変」とあり、これを「変文」を指向する語であるという見方が多くあるが、『賢愚経』の因縁が明かされる部分に「爾時女者今王女是。由其爾時、悪不善心、毀皆賢聖辟支仏、故自造口過。於是以来常受醜形。後見神変、自改悔故還得端正、英才越群、無能及者」とあり醜女の変身を「神変」という。醜女の変身の物語を「醜変」と称したのはこの「神変」という言葉になぞらえたものと考えられる。

以上、各場面での異同をみると、S本には王郎の心情を表現する部分が、P本には醜女の気持ちによりそった表現が多く加筆されていることがわかる。とくにP本での醜女の心情の表現が韻文により多く加筆されていることが注目される。P本は醜女の苦悩のさまに重点を置いて描くことで、聴衆にとって感情移入しやすい物語に改変しているといえる。

## むすび

敦煌写本の醜女縁起は因果応報と仏の救いを説く經典に基づきながら、醜くうまれた娘を不憫に思う母、二人の姉を登場させ、ある家庭のドラマとして仕立て直し、滑稽な場面や表現を加えながら、因果応報の思想を情緒的に世俗の人々に伝えようとしている。

S.4511の系列は、釈迦の前世譚がなく、仏の功德を簡単に述べ、善女が王家に醜く生まれた因縁が説かれて「観世音菩薩」の唱和で醜女の物語が始まる。この系列は、經典に近い表現が多く、そして王郎の心情に重点をおいて物語を展開する。S.4511の写本には、醜女縁起の前に、「結壇転経発願文」の書写があり、一連の仏教儀式の中での口演のために書写されたものと考えられる。

P.3048は、釈迦の前世譚に始まり仏の功德をひとくさり説いてから、醜女の物語を始めている。醜女物語ではS本にあるト書きの部分を少なくして、語りがあまり中断されることなく、醜女の心情を情緒的に歌い上げより成熟した文藝作品となっている。P.3048は醜女の物語を通じて、仏教への信仰を深めるた

めの独立した演芸として、世俗の人々を対象に口演することを目的に書写されたものであろう。この鈔本には、朱字で文字を訂正した箇所がいくつか見え、一度書写したものを実演に備えて点検したものとみることもできる。

注

- 1) 傅芸子「《醜女縁起》与《賢愚経金剛品》」(周紹良・白化文編『敦煌変文論文録』上海古籍出版社、1982、収録、原載『藝文』1943)、関徳棟「《醜女縁起》故事的根據」(『同上』収録、原載1946年12月19日上海《中央日報・俗文学》)、楊青「《醜女縁起》変文及仏経原型」『西北師大学報(社会科学版)』1996・6)など。近年では荒見泰史「『敦煌本醜女縁起』考」(『白山中国学(東洋大学中国学会報)』3、1997)が『法苑珠林』に引く「百縁経」によるとの説を提示している。「醜女縁起」の依拠する経典については、再考の余地があり別に論じたい。
- 2) ジャイルズの目録では9世紀の写本とする。
- 3) 「壬午年」は張氏帰義軍期とすれば862年、曹氏帰義軍期とすれば922年、982年となる。
- 4) パリ国家図書館の目録では8世紀中頃の写本とする。
- 5) 『賢愚経』「爾時波斯匿王最大夫人、名曰摩利、時生一女。字波闍羅晋言金剛。其女面類極為醜惡。肌體羸澁猶如駝皮。頭髮羸強猶如馬尾。」
- 6) 岩本氏は「縁起」の原語はpratitya、「因縁」はpratyayaで、この2語はともに「依存する」「関連する」の意であり、「縁」の原語はnidana(「原因」「起源」の意)またはavadana(「結びつける」の意)とし、仏教文学の類型としてはnidana、avadanaは区別され前者は「戒律制定の因縁物語」であり、後者は一般に「譬喩」と訳されると述べる。
- 7) 『校注』は5点の鈔本による校合された原文であるのでP.3048の原文とは異なるがおおよその位置を示す目安とする。
- 8) 『賢愚経』「毀咎賢聖辟支仏、故自造口過。」
- 9) 「観世音菩薩」の語が見える箇所を『校注』で示せば、531、1081、1089、

1091、1102、1169頁など。

- 10) P本「夫人又走(奏)大王、姉妹三人惣一般、端正醜陋計(繫)因縁。並是大王親骨肉、願王一例賜恩怜。況今成長居深内、発遣令交事况(使向)前。十指雖然長与短、个々從頭試咬看。大王聞奏、不免謔告夫人。我縁一国王王身、眷屬由来断業因。争那就中容貌差、交奴恥見国朝臣。深知是朕親生女、醜差都来不似人。説着上由(尚猶)心裏怕、如何囑娉向他門。」
- 11) 「道何言語」の語は、S.4511ではどの箇所でも小字で記されるが、他の同系の鈔本では、文字の大きさは変わらない。なお、「破魔変」に「当爾之時、道何言語」(『校注』532頁)、「八相変」に「当此之時、有何言語」(『校注』508頁)の語あり。
- 12) 『賢愚経』「王得此人共至屏处、具以情状。向彼人说、我有一女面状醜恶、欲覓嫁处未有酬類。聞卿豪族今者雖貧、当相供給。幸卿不逆当納受之。時長者子長跪白言、当奉王勅、正使大王以狗見賜、我亦当受。何況大王遗体之女、今設見賜奉命納之。」
- 13) 注11参照。
- 14) 『賢愚経』「王勅女夫、自捉戸鑰。若欲出行而自閉之。我女醜恶、世所未有。勿令外人覩見面状、常牢門戸、幽閉在内。」
- 15) 『賢愚経』「今当設計往觀彼婦。即各同心、密共相語。以酒勸之、令其醉臥、解取門鑰。便令五人往至其家開其門戸。」
- 16) S本の仏に祈る醜女を描く韻文は「珠淚連々怨復差(嗟)、一種為人面貌差。玉葉不生端正相、金騰(藤)結朶野田花。見説牟尼長丈六、八十隨形号釈迦。唯願世尊加被我、三十二相与些々」とあり、S本では位置が異なり、後に置かれている。P本はこの句の位置を修正している。
- 17) S本はこの部分「佛已通心、遙見金剛醜女燒香發願。遂於醜[女]居处塔前、悲泣恰似四馬而分離、思念自身、不恨滅没而入堆。願世尊、願垂加備云云」とあり、次に「珠淚連々怨傷差、一種為人面貌嗟」で始まる韻文を置く。注16参照。
- 18) 『賢愚経』「仏知其志即到其家、於其女前地中踊出。現紺髮相令女見之、其女举頭見仏髮相、倍加歡喜。歡喜情敬敬心極深、其女頭髮、自然細軟如紺青色。仏復現面女得見之、見已歡喜、面復端政、惡相羸皮自然化滅。仏復現身、齊腰以

敦煌写本「醜女縁起」について

上金色晃昱、令女見之。女見仏身、益増歡喜。因歡喜故惡相即滅、身体端嚴。」

- 19) S本「於是槍旗耀日、皂毒（蠶）千般、七宝珍財、奉献其仏。百官従駕如行、千官咸命従後、同赴祇園、謝女端正。経於一宿、已届祇園、謝仏重恩、再三請問」をP本「於是槍旗耀日、皂蠶隱映、百寮従駕、千官咸命、同赴仏園、謝主公号端正」と簡略化。

(付記) 本稿は平成26年度科学研究費補助金（基盤研究C「日中説話比較に向けての敦煌文献説話研究」課題番号：26370404）による研究成果の一部である。